

1.5 調査・研究活動

新島・式根島の虫

「ことはすこしいつもとちがうみたい」

2003.9.02 式根島 小倉 暁雄



ベニシジミ (式根島)

2002年から2003年にかけては、島にとって異常ともいえる気象だったようです。そのせいか、日本全体の温暖化のせいか、あるいは気のせいかもしれないけれど、島の昆虫にとっても、今年はこれまでとはようすがちがうような気がします。

島のチョウに動きがありました。式根島ではそれまで少なかったナミアゲハが、2年ほど前からふえてきたようで、今年はたくさん見られます。新島でも同じ傾向があるようです。また、新島では今年はジャノメチョウが向山一帯で多く発生しています。いきいき広場ではモンキチョウとベニシジミが、久しぶりかも知れない顔を見せました。宮塚山では、これまで年に数回しか見られなかったルリタテハが数匹まとめて見られました。式根島では、年に1匹見るかという少ないチョウですが、同時期に採れています。(新島については、いずれも新島の自然愛好家の山下仁左衛門さんからの情報、7月27日～8月11日・筆者確認)

そして、日本で北上を続けていたムラサキツバメシジミが、昨年はどうとう新島へも上陸して、秋(11月30日)にはサザンカの花にきていました。その驚きがさめないうちに、同じく北上中のナガサキアゲハが、今年はおそまきながら新島へ進出して、モンキアゲハに似たメスと、クロアゲハに似たオスが、木々のあいだを舞っていました(7月22日)。もとはおもに九州に見られたこの2種が、ほとんど同時に新島に到達したわけです。おそらく数年前に新島・式根島に住みついたクロコノマチョウに続いての、島での新しいチョウの出現です。[式根島9月1日採取]

セミも気になります。式根島ではここ2・3年、クマゼミの声がその前より多く聞けました。そして新島でも今年(2003年)の夏は、相変わらずクマゼミが勢力をはるなかに、ヒグラシ(新島では宮塚山の上のほうにしかいません)とミンミンゼミの声が、昨年よりはるかに多く聞けました。山下仁左衛門さんによれば、昨年の宮塚山ではヒグラシの声はそんなに聞けず、アブラゼミが例年より多く発生していたそうです。数年前にさかのぼらなければ何ともいえないとはいえず、セミの世界にも何か起こっているのでしょうか。

また式根島では、昨年も今年もノコギリクワガタの発生が少ないようです。大きいし人気がある虫ですから、森林環境の破壊や街灯の増加などで目につき、とられて減ったのかもしれない。けれどもノコギリクワガタは、式根島ではニイニイゼミと関係がありそうなのです。これもセミに関係したできごとなのでしょう。

それから今夏は姥山や酒仙水で、オニヤンマがたくさん見られました。いつもは夏に潤れるような小さな流れで育つので、不順な気候でかえって生き残る幼虫が多かったのかもしれない。他にも、前浜近くのランタナの実に、深夜アケビコノハが10匹くらい群がっていたそうです。



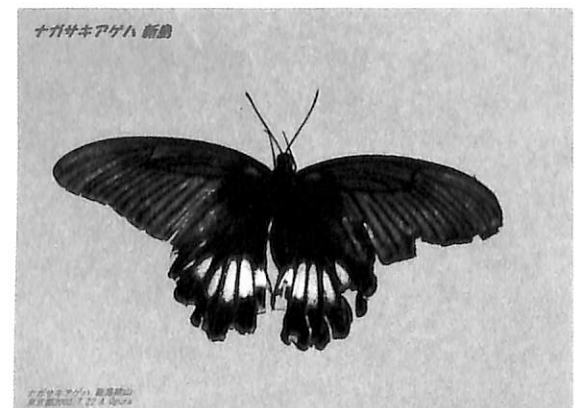
ジャノメチョウ (新島 向山)



モンキチョウ (新島)



ムラサキツバメ (新島)



ナガサキアゲハ (新島)

(8月10日 植松 正光さん撮影・筆者確認)。

これは新島ではよく見られる光景なのでしょうか。また、8月になって博物館の電灯にフタモンウバタマコメツキがよく来ます。日本でも最大級のコメツキで、枯れた松から発生しますが、そんなに多く見られる虫ではないと思ったのに。どちらも実際は毎年よくあることで、今年たまたま気づいただけなのかも知れませんが、おどろきです。

チョウやセミやクワガタのような、目立つ虫だけが変化しているのではないはずです。あまり目につかないだけで、島のいろいろな虫のようすが変わっているのかも知れません。年によってちがう虫の世界のことですから、温暖化だの異常気象だのと断定はできませんが、ちょっと気になります。



ミンミンゼミ (新島)



アケビコノハ (新島)



オニヤンマ 新島

オニヤンマ (新島)



フタモンウバタマコメツキ (新島)

新島・式根島の虫

「ことはすこしいつもとちがうみたい」…続編

2004.1 式根島 小倉 暁雄



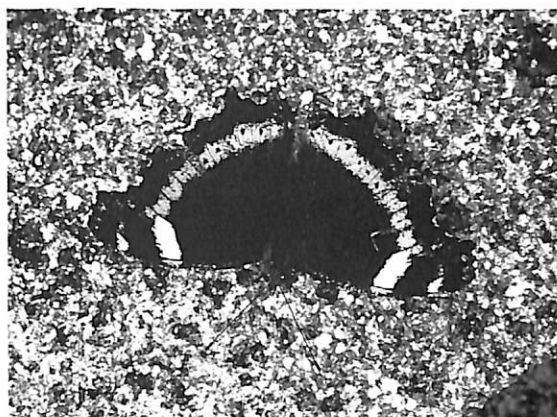
ツバメシジミ 式根島

ツバメシジミ (式根島)

式根島では、そのあともチョウについて、いつもの年とは違う傾向が見られました。

- ・ 9月10日に、とうとうナガサキアゲハが庭のランタナをおとずれました。そのあとは何日も、新鮮な個体を含めて何匹もが、家の前のハイビスカスをおとずれてきました。式根島にもついに上陸したのです。
- ・ 9月終わりに、ここ数年見たことのないツバメシジミが見られました。[今まで見逃していた可能性もありますが・・・]
- ・ 10月にはいって、キチョウが例年より多く見られました。
- ・ ウラギンシジミも例年よりいくらか多く見られました。10月半ばには、これまで[数年]見たことのないベニシジミがあらわれました。[新島でも、このころも目撃されています・・・山下仁左衛門さん]
- ・ さらにおなじころ、とうとうムラサキツバメに、アシタバの花で出会いました。式根島にもついに進出です。[11月はじめに、新島でも去年のが無事越冬したらしく、また目撃しました。]
- ・ これらのチョウ以上に驚かされたのが、10月はじめのオオキンカメモシの出現でした[森山みちよさん]。下田にいるし移動性が強いことから、不思議はないのかもしれませんが、これだけ目立つ虫が今まで記録にないので、珍しいことなのでしょう。

この年は海水温も例年より高いとかで、海の生き物にも変化が見られました。なかでも、12月にホシダカラ[貝]の成体が複数得られたのが、特筆すべきことかもしれません[前田福雄さん・今井政樹さん]。昔はいた貝なのに、ここ数年は子貝の殻ばかり見ていました。[少なくなった上に、冬の寒さで死んでしまうのだと思います。]このようすと、ほかにも目に触れていないところで、なにか例年とは違うことが、まだまだあるのだろうと思われます。



ルリタテハ (新島)



ナガサキアゲハ (式根島)



キチョウ (式根島)



ムラサキツバメ (式根島)

新島・式根島の虫

「ことしはすこしいつもとちがうみたい」…続続編

2005.3 式根島 小倉 暁雄



オオキンカメムシ (式根島)

2004年から2005年春にかけても、新島・式根島の生きものには、例年とは違う傾向が続きました。それまでほど異常なことではないのかもしれませんが・・・

5月半ばに新島玄角の池で、それまで見なかったギンヤンマのすがたが複数見られました。常連のヤブヤンマとクロスジギンヤンマは例年なみに少数くるのですが、それよりはるかに頻繁にギンヤンマが羽化したり、産卵に訪れるようになり、池のホテイアオイの葉柄にはいくつもの羽化殻がみられました。(クロスジギンヤンマとヤブヤンマの羽化殻は例年なみで少なかった。)池にはギンヤンマのヤゴがふえ続け、6月末にはヤゴはみんなギンヤンマという感じになりました。それまで多かったシオカラトンボやオオシオカラトンボのヤゴは極端に減り、よく見られたウスバキトンボやコシアキトンボのヤゴは見つからないという状態になりました。池の周りにはシオカラトンボとオオシオカラトンボが多いのですが、育っているのは池の水が流れ出る隣接した浅いたまり水のようなものでした。

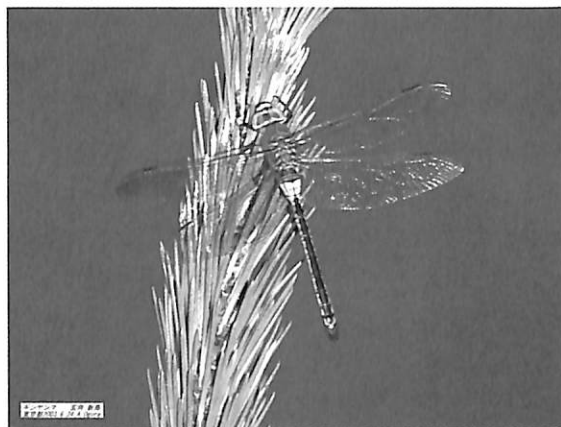
2005年3月に池の水を落としたため、これらのヤゴはおそらく95%あまりが死滅したもようです。この6月末のトンボの観察会で、池に赤いトンボがきました。短時間しかいなかったのですが、近くでホバリングしたので、ベニトンボかそれに似たトンボだったといえます(筆者も目撃)。ベニトンボは九州から沖縄に見られる、小さな紫紅色のトンボです。また赤いトンボは、いままでは新島・式根島では、秋にアキアカネを年に1回くらい見るだけでした。

オニヤンマは2003年のように多くは見られませんでした。オオギンヤンマも見ませんでした。

ムラサキツバメは定着したのか、羽化直後の新鮮な個体や、羽化に失敗して飛べない固体が見られました(山下仁左衛門さん撮影筆者確認)。ナガサキアゲハは春には見られず、7月になって新島でも式根島でもいくつか見ましたが、2003年よりずっと少ないようでした。まだ冬をすごせないのかもしれませんが。今後の動向に興味があります。ベニシジミは少ないながら定着したようです。

7月初めには宮塚山でアブラゼミとヒグラシが大発生しました。山の上の樹には何匹ものセミが群がって鳴き、歩くとばらばらと飛び立ちました。セミにつくカビも猛威をふるい

そこらじゅうの樹にカビにやられて死んだセミがぐっついていました。



ギンヤンマ(新島)



ギンヤンマ脱皮殻(新島)



カビにやられたヒグラシ(新島)

海でもいつもとちがっていました。いそではホシダカラのほかに、偶産かもしれないけれど、近年まず見られなくなっていたハチジョウダカラが出現しました。夏のタカベ漁が不振で、冬に島付近にくるメジマグロが、例年よりおそく春先の2月末まで島の周りをうろうろし、それを引きつけるものになったカタクチイワシは、何度も大群が島のまわりに集まりました。

2004年は暑くて例年になく台風の多い年で、何らかの異変はあってあたりまえだとも感じましたが・・・。



カビにやられたアブラゼミ (新島)

「新島に自生するシイノトモシビタケ」

～ 発見・観察の一記録 ～

東京都立新島高等学校 八木 正徳



シイノトモシビタケ (*Micena lux-corli* Corner: キシメジ科クヌギタケ属)

撮影： 山下 仁左衛門氏

シイノトモシビタケ (*Micena lux-coeli* Corner: キシメジ科クヌギタケ属)は、10年以上前に出版されたある図鑑では「八丈島に固有: 八丈島にしか自生しないキノコ」と紹介されていた。このキノコは、発光生物研究の第一人者であった横須賀博物館の羽根田弥太博士が1954年に八丈島で採集した発光キノコを、戦前・戦中をともにシンガポールの昭南博物館で過ごした世界的な熱帯雨林研究の権威でケンブリッジ大学名誉教授であったE・J・H・コーナー博士に同定依頼して、新種として認められたものである。筆者も2003年8月に八丈島を訪れた際に、八丈島の三原山中腹で発光キノコの保護活動を行っているボランティアの方から、ヤコウタケとともにその存在を教えられていた。また、八丈ビクターセンターで購入したシイノトモシビタケの絵はがきには、「シイの古木の樹皮や朽ち木に発生する。八丈島以外で発見されることは稀。傘の径5mm～12mmの小型のキノコ。八丈島での古い呼び方は鳩の灯(ハトノヒ)」という解説が記されていた。また同年6月、新島老人ホーム職員の新井可奈子氏は利島の民宿のご主人の案内で利島のスダジイ林内で光るキノコを観察したことを、筆者は本人より直接聞いた。



シイノトモシビタケ

これらの情報から、「新島にもシイノトモシビタケは自生しているのではないかと」筆者は考えるようになった。八丈島での発光キノコの保護活動を行っている場所では雲霧がかかりやすく、それでも1日1回散水をしていることに注目して、「自生地は昼に夜に雲霧のかかりやすい日常から湿っている場所」という視点から「宮塚山山頂に自生する可能性が高いのではないかと」推定した。一方、利島の情報から新井氏が確認した発光キノコはシイノトモシビタケであろうと推定して、新島でも「スダジイの古木、朽ち木のある場所」に限定して自生候補地を検討した。更に夜間に車で移動して現地確認が可能な場所として、ロラン局周辺のスダジイの古木を選定して、昼間に現地踏査を行った。

2004年6月19日午後9時過ぎ、筆者、新井氏他4名で車2台に分乗して、自生候補地に選定した宮塚山ロラン局周辺のスダジイの古木まで近づいた。車を止めて、ヘッドライトを点けた状態で、道路から約20mほど森林に向かって懐中電灯で足元を照らしながら目的地まで歩いた。選定したスダジイの古木は樹齢200年は超えていると推定される樹木で、一部の枝が腐朽して落下しているものの、暗闇の中でもその樹形は確認することができた。そして、手にしていた懐中電灯を一斉に消した。その瞬間、朽ちて落ちている枝、苔むした幹、様々なところでシイノトモシビタケは光を放っていた。それは黄緑色の蛍光色で、店頭で販売している「ホンシメジ」を細く、小さくしたような形で光っていた。シイノトモシビタケは我々が来てから光る反応をしたのではなく、そのスダジイの古木に寄生しながら子実体(キノコ)をつくって人知れず光り続けていた。シイノトモシビタケを発見した瞬間の歓声とその感動は、今も鮮烈に覚えている。

そして翌日である6月20日、宮塚山山頂とともに霧がかかりやすい印象のあった十三社神社奥のスダジイ林でも同様に踏査したところ、やはりスダジイの朽ちかけた幹、朽ちて落ちた枝などの5ヶ所に光るキノコ・シイノトモシビタケが自生していることが確認できた。昼間にその場所を観察すると、シイノトモシビタケは傘にうす茶色の筋があるキノコで全体に薄いページュ色をしていた。しかし、7月中旬には同じ場所でシイノトモシビタケを見つけることはできなかった。

2005年6月。昨年の経験から、本年は十三社神社奥のスダジイ林に焦点を当ててシイノトモシビタケの観察を試みた。昨年、発見できた時期が梅雨の最中であったことから、梅雨入り前の5月下旬より昨年シイノトモシビタケが最も多く観察できた場所に2～3日に一度通って、シイノトモシビタケの出現の有無を確認した。梅雨入りが宣言されて新島でも蒸し暑さが増してきた6月9日、前々日には目撃されなかったシイノトモシビタケが突然発生していた。この日は、しばらく曇天続きだった中で突然雨が降ってきた日だった。そして、日を追うごとにシイノトモシビタケはそのスダジイ林や博物館前の道路を隔てた隣のスダジイ林内にも散見することができた。また、この他にも筆者は都立羽伏浦公園近くの檜山のスダジイ林で、新島自然愛好会会長の山下仁左衛門氏によって本村農場付近でもシイノトモシビタケを確認することができた。6月9日以降、降雨の影響で順調に発見・確認できたシイノトモシビタケも6月20日を過ぎると確認できる数・場所も減少して、6月29日に最後の1個を確認してからはシイノトモシビタケを見つけることはできなくなった。

この2年間のシイノトモシビタケの観察で気づいたことがいくつかある。それは、「現在までのところで新島で確認しているシイノトモシビタケは名前の通りスダジイにしか寄生しないこと」、「巨大な古木でなくても、細くて若い樹木でも枯損した部分があればシイノトモシビタケは生育できること」、「スダジイにはカワラタケ(サルノコシカケの仲間)やシイタケのように様々なキノコが寄生するが、シイノトモシビタケの自生している部分には他のキノコは見られなかったこと」、「シイノトモシビタケの集団全体は残っていても、1個の子実体(キノコ)は2日～3日で溶解・消失してしまうこと」の4点である。

また、本年度確認したインターネットのホームページ上では、八丈島の他、和歌山県周参見町、那智勝浦町、古座川町、熊野市、大分県三重町、宮崎県日向市、えびの市、兵庫県西六甲(植物園内に奄美大島から移植されたシマサルスベリの古木に寄生している)、鹿児島県屋久島からもシイノトモシビタケの自生が確認されているという情報が公開されている。また、三重県以北まで、現在分布を拡大させているという情報もある。これらの分布地から考えると、新島は太平洋沿岸地域の中では、利島、八丈島とともに最北・最東の位置にある貴重な自生地といえる。

これからも、新島での生育状況の観察に加え、近隣の式根島、神津島、伊豆大島、三宅島での分布の有無を確認することが急務である。そして、新島のシイノトモシビタケは最近になって分布したものか、古くから分布していたものかを検討する必要もある。

今回の発見を通じて、新島の古老の方から「かつて檜山で人魂を見たことがある」などのお話を聞き、その中にはその人魂はシイノトモシビタケだったのではないかと思われる証言も見受けられた。現在確認されているシイノトモシビタケの分布地とこのような証言を収集することで、シイノトモシビタケの過去、現在の分布と生態が明らかになることを期待して、来年の梅雨時の再会を楽しみに待っている。

追記

シイノトモシビタケは、式根島でも2005年6月に同島在住の小倉暁雄氏によって自生が確認された。